

富士山のふもとで、たねを育てる ファブリス・イベール

2009年4月26日（日）—8月31日（土）

Je s'aime Fabrice Hyber



フランスを代表するアーティスト、ファブリス・イベール。

‘富士山がみたくなったら、日本に行くよ’という言葉で  
「たねを育てる」展は、はじまりました。

2008年、東京という大都市の中でさまざまなたねを育て、  
今度は富士山のふもとでたねを育てます。

彼にとって ‘たね’とは、様々な思想や行動の源としてのメタファーであり、実際の木々、野菜のたねもあるのです。

本展はわらでできた『テディ・ベア』、根がなく先端がどちらも枝である『ありえない木』、野菜でできた『MIT man』等の立体作品、新作を含めたペインティングの大作約10点、ドローイング約80点、実際に畑でたねから野菜を育てるプロジェクトで構成される予定です。

*僕は森を育てるように、アイデアを育てる。*

*アートは、ひとつのアイデアから生まれる。*

*アートは、世界を大前提につくられる。*

*僕にとって、アートは、理解の可能性を多様化させ、新しい行動を起こさせる。*

ファブリス・イベール

○アーティストによるオープニングトーク

2009年4月26日（日）14：00-

ヴァンジ彫刻庭園美術館 展示棟内

ファブリス・イベール：

私はいつも展覧会というのは、ひとつの実験、すなわち、「exposition」は「expérience」であり、ひとつのテスト、生の可能性を探るところであると思っておりました。快適な心地よい彫刻が置いてあるような特権的な優れた場所で、そのような試みを行うことができる、そういう意味では展覧会というのは、ひとつの異例な、比類ないこと「exception」でもあるのです。

今まさに新しい世界が生まれつつあり、その世界のなかで起きていることに対し、様々な問いかけが可能であり、様々な回答といったものが可能であると思います。まさしく展覧会というのは、そのような回答のひとつを提案する場所ではないかと思います。ですから、こういった展覧会、あるいは私の工房であるアトリエというものは、ときにはどちらも混ざりあって、基本的な研究を行う場所というように考えております。まさしく科学研究、サイエンスのラボラトリーでの基礎研究という意味でもあり、大規模な企業などで開発をするような基礎研究という意味にもつながっていきます。本当に実物大で、特別な実験を行う場所、それが私のアトリエであり、展覧会であると思っております。

そのような特別なとき、研究を行っているとき、展覧会のための仕事をしているとき、その瞬間というのは決して悲劇的なことではなく、むしろ楽しいとき、陽気な気持ちを味わえるときであります。これは私にとって比類のない時間であり、私を招待していただき、一緒にいろいろと仕事をしてくださる皆さんにとってもそういう時間であることを願っています。もう、一世紀も前から、デザイナー、クリエイターというものは、決まりきった型、定まったモデルをつくるものだ、という考えに我々は慣れていました。それは、メーカーがつくるモデルでもありますし、デザイナーがつくるモデルでもあるのですが、今や、そのようなモデルがあまりにも氾濫しすぎていて、なんの役に立たない公害となっているように思います。もちろん、公害といえば、それに相対するものとして出てくるのは、環境保護、エコロジーです。我々は、環境に対する解決策をみつめるものとして、エコロジーといったものを考案してまいりました。既に東京のワタリウム美術館でも、皆さんが植物に対してもう少し親しんでいただこうと、例えば、植物というのはどのように大きくなるのだろうか、どうすれば木々や草は育つのか、どうやってたねを蒔けば、葉が大きくなっていくのか、あるいは、苗を植えて、どういう場合には育ち、どういう場合に育たないのか、そういうものを実際にお示しするということが、前回の展覧会における私のひとつのコミットメントでもありました。

一年前の東京のころは、私は食べたものが悪かったのかウイルスなのか、病気になってしまいました。一年前にいろいろと考えたことから、公害というのは何かが起きてからというのではなく、それより前もって遡って考えるべきではないかと、より強く思うようになりました。公害、エコ

ロジック、という言葉が出てきたときは、もう既に遅すぎますので、もっとその前に考えなくてはならない、これを、精神的（メンタル）なエコロジーと名づけてもいいのでしょうか。ものごとが起きる前に、公害が生まれる前に、公害対策といった事前の対策を考えるべきなのではないか、と思いました。

もちろん世の中でいろいろなものが作られています。製品の製造が行われる上で、悪影響というものが出てきています。ものを作ったとき余ったもの、廃棄物も出ますし、その中で貧困も生まれ、公害も生まれます。今回の展覧会の中には二種類の作品があります。ひとつは、そういった我々の世界の失敗の事実確認といえるもの、もうひとつは、今後どのように将来が変化していくかという可能性、証のようなものです。後ほど皆様がよろしければ一緒にその作品の前を歩いてみたいと思っております。

まず、クリエイターが新しい世界をつくるというのは自然のことです。展覧会タイトルは *aimer*（愛する）と *semer*（種を蒔く）の語呂合わせです。ご存知のように *je t'aime* は *I love you* という意味ですが、*je s'aime* で、「私は自分を愛している」が、その対象は第三人称、実はよく知らない人間であるわけです。*Je seme* は、「私はたねを蒔く」という意味です。私はワタリウムでもたねを蒔きましたし、ここでもたねを蒔きました。私はヴァンデ県の幼いころを過ごした土地を買い取りまして種を蒔いて森をつくりました。ご質問のユーモアというものは絶対的に必要なものだと思っています。生きる喜びとか、楽しみとか、基礎研究をするということは、陽気なものとか、楽しいことであると思っております。夢をみたり、笑ったり、楽しく、幸福な状態でいたいのです。パリでもニューヨークでも、私をよく知っている人と仕事をしたいと思っております。

#### ○たねから野菜を育てる・プロジェクト

2009年4月26日（日）－8月31日（月）

場所＝ヴァンジ彫刻庭園美術館庭園内 ファブリス展・畑

#### ワークショップー育てた野菜の収穫祭

場所＝ヴァンジ彫刻庭園美術館庭園内 ファブリス展・畑

会期中、野菜の成長とともに実施を予定しています。

主催 ヴァンジ彫刻庭園美術館

協力 ワタリウム美術館

